

平成8年9月
12日・13日・14日

第26回 日本口腔 インプラント学会総会

第16回 日本口腔インプラント学会
中国・四国支部総会併催

抄録集

総会長 西 嶋 克 巳

岡山大学歯学部口腔外科学第一講座
〒700 岡山市鹿田町2-5-1
TEL 086-235-6697
FAX 086-223-6864

1、洞底骨造成術における骨造成の実験組織学的研究

—洞粘膜挙上空隙へのコラーゲン材の補填—

○清水治彦、日高豊彦、岩野清史、中尾泉、渡辺孝夫

瀬戸 完一

鶴見大学歯学部第1 口腔外科学教室

洞底骨造成術(SSA)における有用な補填材を探る目的で犬前頭洞にSSAおよびインプラント植立術を施し、SSAにおける洞粘膜挙上後の空隙にコラーゲン材を填塞し術後1ヶ月で屠殺、組織学的に検索した。

実験動物：雑犬3匹、体重約10kg、成犬。手術部位：左右前頭洞。インプラント：チタンインプラント(Bräne-mark, Nobelpharma)。補填材：①犬NO.1、実験側として右前頭洞にSSA術を施し、洞粘膜挙上空隙にブタ皮膚コラーゲンフリース(Pentapharm)を填塞、対象として左前頭洞にインプラントを穿孔、植立した。

②犬NO.2、NO.3、実験側として右前頭洞にSSAおよびインプラント植立術を施し、洞粘膜挙上後の空隙に牛皮膚コラーゲンスポンジ(高研)を填塞、対照として左前頭洞はSSAおよびインプラントを植立、空隙に補填材を使用しなかった。施術方法：ケタラール筋注、ネプタール静注による全身麻酔下で前頭部に横に切開線を入れ骨を露出した。SSAを施した群では前頭部骨面に5×7mm大、長方形に骨溝を形成し周囲骨と切り離した後洞粘膜をその骨片とともに洞内に挙上し空隙を形成した。この状態で開窓部より約5mm離れたところにインプラントを植立、さらにその空隙に実験側ではコラーゲン材を填塞、対照側では補填材を使用しなかった。インプラント洞内穿孔群ではSSAを施さずインプラントを洞内穿孔植立した。ついでいづれの群も通法のごとく骨膜縫合、皮膚縫合を施し、手術を終了した。組織学的観察：前頭洞部を切り出した後、通法にしたがい脱灰標本を作成、H. E. 重染色、AZAN染色を施し、インプラントに近い部分の前額断、割面を顕微鏡にて観察した。

結果：①洞粘膜挙上空隙に補填材を用いなかった群では洞壁の表面および洞粘膜とともに挙上した骨片周囲に新生骨を認めた。②補填材としてコラーゲン材を用いた群では材料の違いにより骨新生を認めたものと炎症性反応を示したものに分かれた。③インプラントを洞内に穿孔したものでは骨新生はみられなかった。